

令和元年度病害虫発生予察 注意報 第1号

令和元年7月1日
大分県農林水産研究指導センター
農業研究部

対象作物：白ネギ
対象病害虫：シロイチモジヨトウ

- 1 対象地域 県北部地域
- 2 発生面積 多い
- 3 発生量 多い
- 4 発表の根拠

- (1) 6月中旬の巡回調査結果では発生圃場率、被害葉率ともに平年より高かった(図1)。
発生圃場率：75.0% (平年：5.0%、前年：12.5%)
平均被害葉率：2.5 (平年：0.1、前年：0.3)
- (2) 6月の発生圃場率、被害葉率が過去(平成14年度～令和元年度)最大である(表1)。
- (3) 平成29年から平成30年に多発しており、圃場内密度が高い事が予想される。
- (4) 本虫は高温乾燥条件で発生が助長される。気象庁の1か月予報(6/20発表)では平年より気温が低く、降水量は平年並と発表されているが、今後の気象次第ではシロイチモジヨトウの多発が懸念されるため気象情報に注意し、圃場内でのシロイチモジヨトウの発生状況に応じて防除を行う。

5 病害虫発生予察巡回調査による白ネギシロイチモジヨトウ発生状況

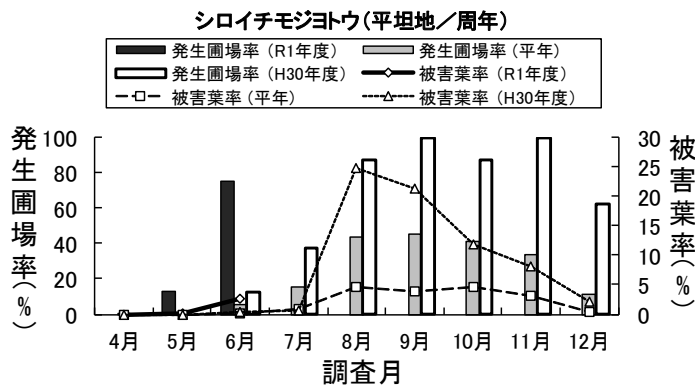


図1 白ネギシロイチモジヨトウの発生推移

表1 過去の発生状況(平坦地)

年度	6月	
	発生圃場率 (%)	被害葉率 (%)
平成14年度	0	0
平成15年度	0	0
平成16年度	0	0
平成17年度	0	0
平成18年度	16.7	0.2
平成19年度	0	0
平成20年度	0	0
平成21年度	12.5	0.5
平成22年度	0	0
平成23年度	0	0
平成24年度	12.5	0.3
平成25年度	0	0
平成26年度	12.5	0.1
平成27年度	0	0
平成28年度	0	0
平成29年度	0	0
平成30年度	12.5	0.3
令和元年度	75.0	2.5

6 防除対策

(1) 薬剤に対して感受性が低下した個体群が確認されている(表2)。特にジアミド系薬剤は2006年当時に比べて感受性が低下している地域があるため、散布後に防除効果が認められない場合は使用を控える(表2)。

表2 白ネギシロイチモジヨトウの各薬剤に対する感受性調査結果(2006,2017,2018大分)

IRAC	系統名	薬剤名	補正死虫率(%)			農薬に対する感受性
			2006年 ¹⁾	2017年 ¹⁾	2018年 ²⁾	
6	マクロ	アフアーム乳剤	100	100	100	高い
5	スピノ	スピノエース顆粒水和剤	92.2	100	100	
13	その他	コテツフロアブル	95.3	100	100	
un	その他	プレオフロアブル	81.5	100	100	
5	スピノ	ディアナSC	-	100	100	
6	マクロ	アニキ乳剤	-	100	100	
28	ジアミ	ベネビアOD	-	80.1	100	
15	I GR	カスケード乳剤	20.6	33.1	3.3	低い
28	ジアミ	フェニックス顆粒水和剤	98.9	21.1	0	
28	ジアミ	プレバゾンフロアブル5	86.7	12.2	0	

※補正死虫率=(対照生存虫率-処理生存虫率) / 対照生存虫率×100

※ 1)豊後高田市3地区平均値、2)豊後高田市1地区値

- (2) 本虫は農薬に対する抵抗性を獲得しやすいため、同系統の薬剤を連続して使用しない。また、地域が一体となって散布薬剤の見直しや同時期での一斉防除、交信攪乱剤の導入等に取り組むことが重要である。
- (3) 本虫が葉身内に侵入すると防除効果が著しく低下する。葉身内に侵入する前に防除を行う事が重要である。
- (4) 散布時は展着剤を加用し、十分な薬液量(ラベル記載内容の範囲内)で丁寧に散布する。
- (5) 防除薬剤は、大分県農林水産研究指導センター病害虫対策チームホームページ内にある「大分県主要農作物病害虫及び雑草防除指導指針」(<http://www.jppn.ne.jp/oita/>)を参照する。なお、薬剤によっては、指針の更新日以降に登録内容が変更されている場合があるため、容器のラベルに従って使用する。



病害虫対策チームホームページ